

奈良学園高校敷地内で活動するアライグマ、イノシシの行動調査 —動体検知カメラを使用した獣道の調査—

土井仁太・大江悠生・明石茂之・前田凌佑（私立奈良学園高等学校）

【キーワード】 動体検知カメラ、アライグマ

1. はじめに

昨年、奈良学園高等学校敷地内（以下校内とする）で行われた生態調査で、7種類の哺乳類が校内で活動していることがわかった。①この中には、毎年農作物や植物に多くの被害を与えているイノシシ②、③や、中型哺乳類、農作物、建築物への被害を与えているとして特定外来生物に指定されているアライグマ④も確認された。そこで私たちは校内で活動する害獣であるイノシシ、アライグマに注目し、これら2種の行動について調べた。

2. 研究目的

この調査を行う目的は、害獣対策を行うにあたっての基礎データの収集だ。イノシシが餌を探すために掘り返すことで校内の希少植物が傷つけられることや、アライグマが校内で活動する中型哺乳類の餌場を奪ってしまう可能性がある。そのためこれらの生物が侵入するポイントや、希少植物、農作物には重点的に害獣対策を行う必要があると考える。しかし、これらの対策を行うためにはこれらの害獣の生態や行動を詳しく知る必要がある。また、これらの対策を行うことは奈良学園長学校、高等学校で行われている里山保全活動の目的の1つでもある「生物多様性の保全」につながるのではないかと考えている。

3. 調査1

・目的

校内の様々な場所にカメラを設置し、どのような場所に多く対象の動物が現れるかを調べた。

・期間

2021年6月2日から2021年9月29日まで

・使用機材

この調査ではカメラの前を通ると自動的に撮影を行うことができるトレイルカメラというものを3種類（fig. 1）、最大5台用いた。しかしトレイルカメラの種類、台数は調査中のカメラの故障や追加があったため期間によって少し変動した。

・調査範囲

カメラを設置する範囲を校内で対象動物がよく現れる里山（赤線内）に絞って調査を行った。（fig. 2）



fig. 1



fig. 2



fig. 3

・結果

fig. 3の青色と黄色の四角はカメラを設置した場所を示しており、そのうち青色の四角はアライグマが確認された場所を示している。

fig. 4は1日あたりのアライグマの撮影回数を設置場所別に示した。特にP. 1、P. 20がとて多かつた。またP. 1ではアライグマが柵を登り、乗り越える様子 (fig. 5) も撮影された。そしてこの調査ではイノシシは確認されなかつた。

この調査で撮影された動物はアライグマだけではなく、タヌキなどの中型哺乳類やネズミ類などの小型哺乳類だけでなく、キジやヤマシギ、ヤマガラなどの鳥類、ヘビなども撮影されていた。

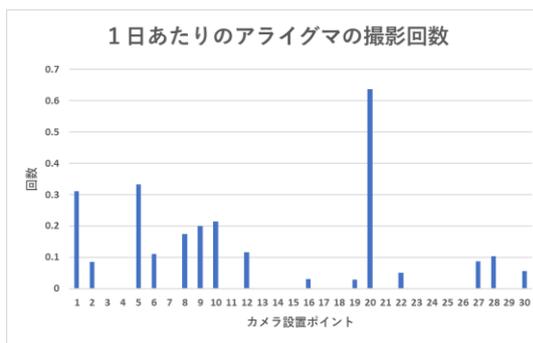


fig. 4



fig. 5

・考察

- イノシシが確認されなかつたのは、去年から設置されていた防害獣柵が fig. 3にある緑の線上に設置されたため校内に侵入できなかつたからだと思われる。また、柵付近ではイノシシによる掘り返し跡が見つまっているため、柵のすぐ近くまでは降りてきていると思われる。
 - アライグマが調査区域内の様々な場所で確認されたことから、アライグマは人が入らない場所などで局所的に活動しているわけではなく、里山全域で活動していると思われる。
 - P. 1が最も多くアライグマが確認されたことや、何度もこの地点から柵を超えて校内に侵入していることから、P. 1はアライグマの侵入ポイントだと思われる。
 - fig. 3にある赤線、R. 1上のカメラは1回以上アライグマを撮影していることから、ここはアライグマの行動ルートの1つだと思われる。
- この結果から調査区域をP. 1付近に絞り調査2を行った。

4. 調査2

・目的

P. 1 (fig. 3) 付近のアライグマの行動ルートを調べた。

・期間

2021年9月30日から2021年11月24日まで

・使用機材

トレイルカメラを4種類 (fig. 6)、最大8台使用した。



fig. 6

・調査範囲

P. 1 とそこに続く道にカメラを設置した。fig. 7

・結果

青色と黄色の場所がカメラを設置した場所であり、そのうち青色の場所がアライグマを確認できた場所だ。

① fig. 8 上の P. 1 で継続して侵入が見られただけでなく、新たに P. 27 でも侵入が確認された。また R. 1 上のカメラでも継続してアライグマが確認されることから継続して使われていると思われる。

② R. 2 付近でもアライグマが通るのが確認された。また Fig. 8 上の里池周辺ではアライグマと思われる足跡が見つかった。

③ P. 1 や R. 1 付近では親 1 匹が子供 2 匹を連れた個体が確認された。

・考察

① P. 1 は金属製であり、R. 1 も人がある程度通る道であるためこのアライグマたちは人慣れしていると思われる。

② R. 2 の先には里池やクリの木など餌のある場所があるため、餌場へ行く道だと考えられる。

③ 6 月には見られなかった子連れの個体が現れたことから本校周辺で繁殖していると考えられる。

④ R. 1 の周りにも獣道と思われるものもあるため、少し道から外れた地点でも活動ルートがあると思われる。



fig. 7



fig. 8

5. まとめ

P. 1、P. 27 は侵入ポイントだと思われる。そして、R. 1、R. 2 は行動ルートだと思われる。ただ、R. 1、R. 2 は更なる調査をし、さらに細かいルートを調べたいと考えている。

個体識別ができる個体が現れたため子離れするまではその個体のルートを調査することができると思われる。

6. 展望

調査 2 は調査 1 の 1/3 の期間しか行っていないだけでなく、哺乳類であるためデータ数も少ないため、継続した調査が必要だと考える。また、子連れ個体は個体識別ができるため、この個体を用いた詳しい行動調査や、さらに範囲を広げた生態調査も行いたい。そして、これらの調査の結果から被害を抑える対策を考え、実行したい。

7. 参考文献

- 1) 池田 英寿 (2021) 奈良学園高校敷地内における野生動物の観察とその動向
- 2) 奈良県 29 年度 有害鳥獣アンケート調査
- 3) 環境省外来生物法ウェブサイト (Accessed on 2010-12-02) <http://www.env.go.jp/nature/intro/>